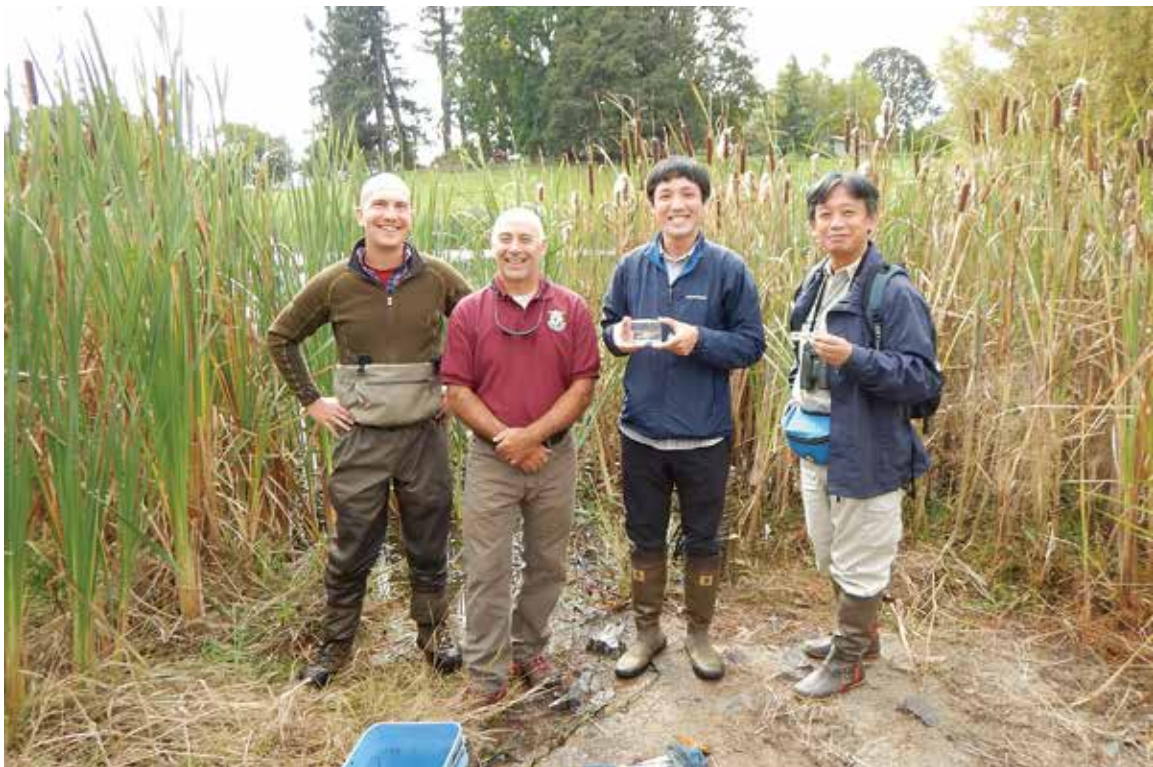


今年は生物多様性条約締約国会議 COP10で採択された2011～2020年の世界目標である「愛知目標」の達成への折り返しの年です。当センターでも目標達成に向けて多様な主体との連携、協働を進めて、より一層生物多様性の推進に努めます。

本号では、県職員短期海外研修として、絶滅危惧種を回復させたアメリカ合衆国オレゴン州の先進事例の紹介と、平成27年11月5日～6日に本県で開催された第18回自然系調査研究機関連絡会議 NORNAC18及び第15回企業と生物多様性セミナーの開催結果について報告します。

絶滅危惧種を回復させた海外の成功事例に学ぶ (アメリカ合衆国オレゴン州)



左からオレゴン州魚類野生生物局のバングズ氏、連邦政府魚類野生生物局のアレン氏、千葉県生物多様性センター職員の鈴木規慈と小野知樹（撮影・御巫由紀）。オレゴン州コーバリス市内のオレゴンチャブの生息地にて。

生物多様性センターでは、平成27年9月29日～10月9日に、県職員の短期海外研修制度を利用して、アメリカ合衆国オレゴン州において、「絶滅危惧種の積極的保護管理に係る先進事例の調査」を実施しました。

CONTENTS

- 1 絶滅危惧種を回復させた海外の成功事例に学ぶ（アメリカ合衆国オレゴン州） 1
- 2 第18回自然系調査研究機関連絡会議NORNAC18を開催しました 3
- 3 第15回企業と生物多様性セミナーを開催しました 3
- 4 文化の日千葉県功労者表彰（環境功労）を受賞～御宿町ミヤコタナゴ保存会～ 4
- 5 千葉県の希少種（タゴガエル）..... 4

オレゴンチャブの回復事例



オレゴン州スプリングフィールド市内のオレゴンチャブの生息地において、モル氏(マッケンジーリバートラスト協会)から説明を受ける生物多様性センター職員(御巫・小野)

「オレゴンチャブ(Oregon chub, *Oregonichthys cramevi*)」は、コロンビア川の支流ウィラメット川流域にのみ生息する小型のコイ科魚類です。合衆国の連邦法であるESA (Endangered Species Act) に基づき Endangered (絶滅危惧種) に指定されていましたが、2015 (平成27) 年2月に、同国で初めて絶滅危惧種から除外された(絶滅の危機から回復した)淡水魚でもあります。これは、「オレゴンチャブ回復計画(Oregon chub Recovery Plan)」に基づき、連邦政府、州、NGO等の関係者が連携して回復事業を推進した結果で、合衆国における絶滅危惧種の保全の成功事例であるとともに、世界で唯一の成功事例です。



絶滅の危機から回復したオレゴンチャブ。日本国内に生息する、モロコ類などのコイ科魚類と類似している。

オレゴンチャブの減少要因と回復までの道筋

オレゴンチャブが絶滅危惧種になった理由として、①ダムの造成による水位変化、②水質汚濁、③国内外来魚(オオクチバス等)による影響等が挙げられます。最も減少した1990年代前半には、残された生息地の多くで100個体以下にまで減少してしまいました。そのため、1993年に「絶滅危惧種」に指定され、州が主体となってオレゴンチャブ回復事業が開始されました。その後、州による生息状況等の調査をもとに国と州が協議し、回復目標(20箇所以上で、各500個体以上を7年間以上維持する)と、そのためのロードマップ等が明示された「オレゴンチャブ回復計画」が1998年に策定されました。

1993年の絶滅危惧種の指定直後に開始された回

復事業では、州が中心となって、ウィラメット川流域全域における生息状況や繁殖生態等の調査研究が実施され、オレゴンチャブの詳細な生態が初めて分かりました。そして約1,100箇所にも及ぶ生息状況調査の結果、再導入候補地だけでなく、新たな生息地も発見することができたのです。

また、マッケンジーリバートラスト協会(地域のNGO)の所有地(河畔林を含む河川周辺の氾濫原環境)でもオレゴンチャブが見つかったことから、NGOと州が連携して生息地の環境維持・整備が進められました。さらに、同協会の紹介により、ウィラメット川流域の大規模農家等の土地所有者と連携し、回復計画に基づきオレゴンチャブの放流(再導入)が実施されました。

その結果、78箇所で合計約160,000個体が確保され(2013年時点)、2015年に絶滅危惧種から除外されました。「オレゴンチャブの回復」という小さな魚の成功は全米のメディアにも取り上げられることになりました。

絶滅危惧種ミヤコタナゴの回復につなげるために

オレゴンチャブの減少要因は、ミヤコタナゴを含むわが国の状況と同様であり、回復するための目標設定や手法は他の淡水魚類にも応用できると考えられます。

つまり、①生息地全体を把握し課題を抽出した上で、②具体的な回復目標を設定し、③道筋等を明示した回復計画に基づき、④国、州、NGO等が一丸となって回復に取り組んだことが、成功の秘訣と考えられます。

わが国では、ミヤコタナゴを含む一部の絶滅危惧種については、国が「保護増殖事業計画」を策定しています。同計画は、回復計画に相当するものですが、具体的な保全・回復目標やそのための道筋等までは記載されていません。

県ではこれまで、ミヤコタナゴの保全事業について、現生息環境の維持管理による絶滅の回避と系統保存を中心に行ってきましたが、現状では回復に至っていません。今後は、オレゴンチャブを参考とした回復目標の設定やそのための手法を含めた、具体的な計画を検討するとともに、関係者と一層連携した取組を推進していきます。

最後に、現地研修でお世話になりました、ブライアン・バングズ氏(オレゴン州魚類野生生物局コーバリス研究所)、クリス・アレン氏(アメリカ合衆国魚類野生生物局オレゴン魚類野生生物事務所)、ジョー・モル氏(マッケンジーリバートラスト協会)を始め、関係の皆様は、心からお礼申し上げます。

(鈴木 規慈 千葉県生物多様性センター)

第18回自然系調査研究機関連絡会議 NORNAC18 を開催しました

「自然系調査研究機関連絡会議 (NORNAC)」は、環境省の生物多様性センターが事務局をつとめ、国や都道府県等の自然系調査研究機関の活動を推進するための会議で、41の研究機関で構成されています。今年度は、千葉県生物多様性センターと千葉県立中央博物館を開催機関として、11月5～6日に開かれました。

1日目の調査研究・活動事例発表会は中央博物館講堂において一般公開で行い、NORNAC構成機関及び関係機関17団体から口頭発表9件、ポスター発表13件、計22題の調査研究結果の発表がありました。

口頭発表では、当センターからは次の2題を発表し、他に、干潟におけるアオサ類の生態系機能研究や全国鳥類繁殖分布調査、信州の自然の恵みと伝統文化、博物館における教育事業の展開、埋土種子から発芽させた水生植物、外来種対策などが発表されました。「千葉県における生物多様性の主流化への取組」

熊谷 宏尚

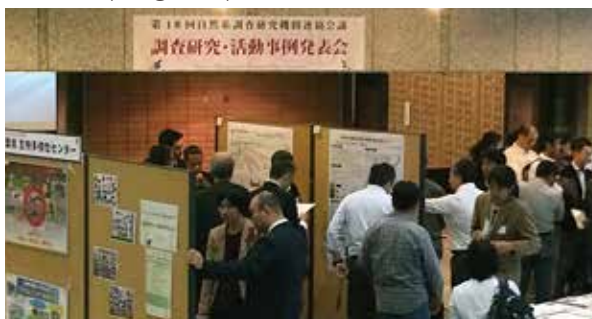
「千葉県におけるシャープゲンゴロウモドキの個体群回復状況について」

小野 知樹

全国の構成機関や環境省関係機関、地方自治体の自然環境行政担当者のほか、一般参加として県内の自然保護や生物多様性の保全に強く関心を持たれている市民や団体等も来場され、総数122名で、発表された調査研究結果等について活発な意見交換が行われました。

なお、当日の発表要旨は環境省生物多様性センターウェブサイトで公開されています。

<http://www.biodic.go.jp/relatedinst/18th/NORNAC18program.pdf>



NORNAC18ポスター発表会場

2日目の連絡会議では、独立行政法人国立科学博物館と山形県環境科学研究センター、栃木県立博物館、山梨県衛生環境研究所、神奈川県立生命の星・地球博物館の新規加入が認められ、これによりNORNACの構成機関は46機関となりました。

会議終了後は、千葉県立中央博物館の企画展示「水草 ふしぎがいっぱい、水辺のいろいろ」と生態園(野鳥観察舎、希少種の水生植物栽培水槽等)の見学会を行いました。(御巫 由紀 千葉県生物多様性センター)



生態園で説明を聞く参加者

第15回企業と生物多様性セミナーを開催しました

県内に工場・事業所のある企業を対象に、(一社)千葉県環境保全協議会と(一社)千葉県経済協議会との共催で、生物多様性に関する情報や企業による先進的な取組事例などの情報提供を行うため、平成27年9月16日(水)に千葉市ビジネス支援センター会議室で開催し、39名の皆様に参加していただきました。

生物多様性保全活動を地域とのコミュニケーションツールとして活用し、地域に根差した保全活動を行っている横浜ゴム(株)の取組事例を「～青い地球と人を守る～横浜ゴムの生物多様性保全活動」と題し、CSR・環境推進室顧問桜井光雄氏から講演いただきました。

横浜ゴムでは、「YOKOHAMA千年の杜」として国内外の生産拠点で2017年までに50万本の植樹目標と、工場ごとの地域に即した保全活動を行っており、参加者からとても参考になったとの感想が寄せられました。

また、生物多様性と遺伝資源(バラの場合)、アルゼンチンアリ(特定外来生物)に関する情報について、県職員から説明しました。

(酒井 さと子 千葉県生物多様性センター)



セミナーでの講演

文化の日千葉県功労者表彰(環境功労)を受賞 ～御宿町ミヤコタナゴ保存会～

平成27年11月3日に、「御宿町ミヤコタナゴ保存会」が「文化の日千葉県功労者表彰(環境功労)」を受賞されました。

これは、同会が長年にわたって取り組んできた絶滅危惧種ミヤコタナゴの保全活動の功績が認められたものです。同会は、平成11年の発足以降、生息環境の維持・改善作業や、耕作放棄された水田の復田、地域の小学校への環境教育活動等をはじめ、ミヤコタナゴの保全に尽力されてきました。

この表彰は、各方面でそれぞれ顕著な功績を挙げ、本県の発展に多大な貢献をされた個人や団体に対して、その功績をたたえるために千葉県知事から表彰を行うもので、昭和23年に文化の日が制定されたのを機に始まったものです。今年度は環境功労を含む16功労で50名の方と2団体が受賞されました。心からお祝い申し上げます。

(鈴木 規慈 千葉県生物多様性センター)



受賞した御宿町ミヤコタナゴ保存会の渡邊晴雄会長(左)と伊藤博明相談役(右)。中央は千葉県の遠山環境生活部長

お知らせ

生物多様性センターでは次の行事を予定しております。興味をもたれた方は是非ご参加ください。申込方法等は、生物多様性センターホームページでご確認ください。

H28.2.20(土) 10:00～16:30

ミヤコタナゴ保全シンポジウム

於：県立中央博物館 講堂

H28.2.27(土) 9:40～14:40

ヒメコマツ観察会

於：東京大学千葉演習林(清澄)

H28.3.12(土) 13:00～16:00

生命(いのち)のにぎわい調査フォーラム

於：県立中央博物館 講堂

(酒井 さと子 千葉県生物多様性センター)

千葉県の希少種

タゴガエル

(千葉県レッドデータブック：重要保護生物B)



2月下旬、凍てつく房総丘陵の溪谷を歩くと、どこからともなく『グググッ ググォ』と低い声が聞こえてきます。ちょうどタゴガエルが繁殖期をむかえ、オスがメスを呼んでいるのです。

タゴガエルは本州、四国、九州の山地に分布しますが、源流域に生息するためその存在はあまり知られていません。

タゴガエルの体長は千葉県では3.5～4.5cmほどで、房総丘陵では2月下旬から3月上旬くらいが繁殖期です。繁殖場所は湧き水が出てくる穴の中や水がしみ出す岩の隙間です。ここにオスが入り込んで鳴くので、その様子は観察できません。姿が見えず、まるで崖が鳴いているようなので、私はタゴガエルを『幻のカエル』と呼んでいます。

タゴガエルが産む1卵塊の卵は150個以下と少ないのですが、卵黄が大きいのが特徴です。どうやら、餌が少ない崖の中で何も食べなくても卵黄の栄養だけで変態できるように大きな卵を産むようです。しかもオタマジャクシは泳がなくても水に浸っていれば良いような、水の少ない場所で過ごします。その後、6月上旬に1円玉の半分に満たない7mmほどの子ガエルに変態して崖からでできます。

このようにタゴガエルは、私たちが飲む水の最初の一滴が出てくる場所に命を宿す生き物です。カエルなどの両生類は環境の変化に敏感な生き物なので、タゴガエルは私たち人間の生活に必要な水辺の環境を見つめる門番なのです。いなくなる意味での『幻』にならず、いつまでも鳴いて欲しいと願うばかりです。

(大木 淳一 千葉県立中央博物館)



生物多様性ちばニュースレター No.46 平成28年1月29日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2 (千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <http://www.bdcchiba.jp>